

# みたか環境ひろば 第60号

平成 29年 7月12日号



## 「エコミュージカルとエコイベント」を開催しました！

平成29年6月25日（日）、三鷹市公会堂「光のホール」にて、みたか環境活動推進会議と三鷹市主催による「エコミュージカルとエコイベント」が環境月間に合わせて開催されました。

エコミュージカルの上演に先立って、午後1時30分から午後2時30分まで、ロビーでエコ楽器ワークショップ、おもちゃの病院、エコ・クッキングクイズ、ゴーヤの苗のプレゼントの「4つのエコイベント」が行われました。

エコ楽器ワークショップでは、子ども達が出来上がった楽器（ペットボトルを再利用したマラカス）を持って、嬉しそうに走りまわっている様子が印象的でした。

午後2時30分から光のホールにて環境標語表彰式を行い、その後、午後3時よりエコミュージカル公演となりました。



★ エコミュージカルの様子 ★



★ 「おもちゃの病院」の様子★

演目は「エコミュージカルファンタジー ようかいエコロジーウォーズ」です。妖怪「あまのじゃく」に取り憑かれた友達のお母さんを助けるために、主人公の「まんぺい」が仲間と力を合わせ、「エコな心」を持って立ち向かうストーリーです。

公演にあたっては、オーディションで選ばれた市内在住の小学生47名がプロ劇団の指導のもと、約1か月間稽古を重ねました。

その結果、当日は素晴らしい、元気あふれる舞台となりました。

「エコミュージカルとエコイベント」を通して、環境を守ることの大切さについて家族と話し合う機会になれば良いと思いました。

（山下）

## 自然あふれる緑豊かな街

三鷹市は、都市経済圏であるにもかかわらず自然との共生ができていく希少な地域であると言えます。

「自然との共生」という観点として、農業が盛んで農作物の供給が豊富なこと、水資源が豊かで他の地域に供給できるほどであることが挙げられます。

三鷹市内を流れる野川では、自然のままの蛍が見ることができる憩いの場があります。さらに、桜が有名で外国の方も多く訪れる井の頭恩賜公園は、開園から100年を迎えた現在も自然が保たれているなど、市内には大変貴重な自然環境が存在しています。

上記のとおり、三鷹市は自然環境に恵まれています。生活に根差した課題であるごみ問題・リサイクルや、省エネ行動の実現などに積極的に取り組む必要があります。

身近でかつ重要な問題としては、ごみ・タバコのポイ捨てが挙げられます。三鷹市で長く生活されている主婦の方によると、ポイ捨て対策として市民の地道な取組と行政の取組によって、以前より大分改善されてきているそうです。

環境問題の基本は、他人や自然に対する思いやりの心と、想像力の働きの二つにより改善されると考えます。

ごみの不法投棄であれば、他人に迷惑をかけないといった思いやりの発露、捨てられたことによる悪影響について想像力を働かせるなど、立場を代えて考えるだけで、「ポイ捨ては皆に嫌な思いをさせてしまう。」といったことがわかるはずで。

ちょっとした心配りで住みやすい社会を目指し、最終的には自然との共生を図り、緑あふれる三鷹市を次世代に残していきたいものですね。（安村）

## ガーデニングについて

先日、東京サマーランド「あじさい園」で多種多様の紫陽花を鑑賞してきました。

紫陽花の一種である「アナベル」は白色だけかと思っていましたが、「ピンクアナベル」の群生を始めて観覧し、大変見応えがありました。

また、小高い山を登り切った先にある3,000株の白を敷き詰めたアナベルの「雪山」は絶景でした。

毎日の生活の中で花を愛でたり感動している余裕は中々持てませんが、綺麗にされた庭を目にした時は心が安らぎます。

さて、平成29年6月17日に開催された「心ときめくイングリッシュガーデンの最新事情 魅せるガーデニングの創り方」と題して話された吉谷桂子氏の講演を聞かせていただきました。講演では、自然の緑と花のコントラストが大事であること、花の色は1カ所に2色の系統でまとめることが望ましいこと、何本か同色の塊で植えた方が引き立つこと、黄系は「光」青系は「影」であり最初は目立つ黄色に目が行くが自然の緑でバランスが取れ心安らぐ景色になることなど、イングリッシュガーデンについて学びました。

戦後間もない頃の、猫の額ほどしかない我が家の庭を思い出します。食糧事情が悪いため、柿や梨・葡萄や無花果等の果物と夏冬野菜の畑と化していました。庭の一角に掘られた穴に捨てられた生ごみや枯葉は貴重な肥料になっていました。ガーデニングとはほど遠い話です。時代とともに環境は変わります。我が家の玄関先にあるプランターに雑然と植えられた草花を見て、何とかせねばと思案中です。(明田)



★アナベル★

## 「ツマグロヒョウモン」について

ツマグロヒョウモンは、10年ほど前から関東地方で良く見かけられるようになった美しい蝶です。

本来は、東南アジアや九州地方など、温暖な地域に生息していましたが、だんだんと北上し、2000年前後から関西地方にすっかり定住、普通種になりつつあります。

昨今では関東北部でも見かけられるようになり、これが現在の北限とのことです。(極わずか東北地方でも確認されています。)。どこまで北上するかは、どこまで温暖化が進むかによるのではないのでしょうか。

北極クマが氷の減少にともない生存が危ぶまれていることに反して、この小さな蝶は生息範囲を北へと広げてきました。地球の温暖化が、ごく身近な所でも目に見えて来た証であると言えます。

さて、この蝶は、三鷹市でも多く見られますので、生態について記します。

**色彩・大きさ**：羽は鮮やかなオレンジ色に、黒や茶色のヒョウのような斑点がある。揚羽蝶より小ぶり、モンシロ蝶より大きい。

**幼虫が特徴的**：体長3cm位、黒色の体の背に毒々しいオレンジ線があり、棘のような突起が沢山ある。一見、毒毛虫に見える為処分されやすいが、全く無害で、触っても刺されることは無い。

**食餌**：野生のスミレ、園芸のパンジー、ヴィオラなどスミレ系。冬につよい園芸のパンジーが増えたため、葉の裏で幼虫やサナギの状態越冬出来るようになったことも、北上する要因の一つになった。

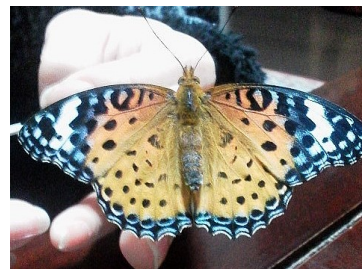
珍しい蝶を見られることを喜ぶべきか、憂うべきか、大いに考えさせられますが、蝶達には何の罪もありませんので、優しく見守り、地球温暖化が与える影響について考えていただければと思います。(矢成)

### 編集後記

幼き頃、映画のワンシーンで「蛍の乱舞」を観たことを思い出し、山口県の「蛍街道西ノ市」を訪れた。「豊田ホテルの里ミュージアム」を備え、蛍を始め小動物の生態が展示説明されていた。観覧後、蛍の景勝地を訪れた際、地元町会の方々がごみ拾いを行っていた。町会のみならず小学生の子ども達も環境保全に尽力されているという。

皆様は、三鷹市においても「大沢の里」にて蛍を観られることはご存知だろうか。こちらも、地元の子どもたちが蛍の飼育や保全活動に携わっている。今では貴重な蛍を三鷹市の地域の方々の尽力によって観られることに感動を感じる。

さて、七月は七夕の季節である。短冊に願いを込めて、「織姫とのランデブー」を期待するが、天の川を肉眼では観測することはできない。子どもの頃、おおぐま座・カシオペア座を頼りに北極星を探したり、流れ星に願いを込めたりしたものだが、今では綺麗な星空を観測することは難しい。蛍、夜空の星空を今後も守っていくために、今一度、環境保全について考えていきたい。(平澤)



★ツマグロヒョウモン★

次回の発行は平成29年10月の予定です。

発行：みたか環境活動推進会議  
(愛称 みんなの環境)

連絡先：三鷹市生活環境部環境政策課  
電話 0422-45-1151 内線2523・2524  
E-mail:kankyo@city.mitaka.tokyo.jp

本誌は、市役所、市政窓口、図書館、コミセンや市のHPから入手できます。